蛙

芥川龍之介

青空文庫

自分の今寝ころんでゐる側に、古い池があつて、そこに蛙が沢山ゐる。

池のまはりには、一面に芦や蒲が茂つてゐる。その芦や蒲の向うには、背の高い白楊の並木が、品よく風に戦いでゐる。その又向うには、静な夏の空があつて、そこには何時も細い、硝子のかけのやうな雲が光つてゐる。さうしてそれらが皆、実際よりも遙に美しく、池の水に映つてゐる。

蛙はその池の中で、永い一日を飽きず、ころろ、からからと鳴きくらしてゐる。ちよいと聞くと、それが唯ころろ、からからとしか聞えない。が、実は盛に議論を闘してゐるのである。蛙が口をきくのは、何もイソツプの時代ばかりと限つてゐる訳ではない。

中でも芦の葉の上にゐる蛙は、大学教授のやうな態度でこんなことを云つた。

「水は何の為にあるか。我々蛙の泳ぐ為にあるのである。虫は何の為にゐるか。我々蛙の食ふ為にゐるのである。」

「ヒヤア、ヒヤア」と、池中の蛙が声をかけた。空と艸木との映つた池の水面が、殆埋る位な蛙だから、賛成の声も勿論大したものである。丁度その時、白楊の根元に眠つてゐた蛇は、このやかましいころろ、からからの声で眼をさました。さうして、鎌首をもたげながら、池の方へ眼をやつて、まだ眠むさうに舌なめづりをした。

「土は何の為にあるか。艸木を生やす為にあるのである。では、艸木は何の為にあるか。我々蛙に影を与へる為にあるのである。従つて、全大地は我々蛙の為にあるのではないか。」

「ヒヤア、ヒヤア。」

蛇は、二度目の賛成の声を聞くと、急に体を鞭のやうにぴんとさせた。それから、そろそろ芦の中へ這ひこみながら、黒い眼をかがやかせて、注意深く池の中の様子を窺つた。

芦の葉の上の蛙は、依然として、大きな口をあけながら、辯じてゐる。

「空は何の為にあるか。太陽を懸ける為にあるのである。太陽は何の為にあるか。我々蛙の背中を乾かす為にあるのである。従つて、全大空は我々蛙の為にあるのではないか。既に水も艸木も、虫も土も空も太陽も、皆我々蛙の為にある。森羅万象が悉く我々の為にあると云ふ事実は、最早何等の疑をも容れる余地がない。自分はこの事実を諸君の前に闡明すると共に、併せて全宇宙を我々の為に創造した神に、心からな感謝を捧げたいと思ふ。神の御名は讃むべきかなである。」

蛙は、空を仰いで、眼玉を一つぐるりとまはして、それから又、大きな口をあいて云つた。

「神の御名は讃むべきかな……」

さう云ふ語がまだ完らない中に、蛇の頭がぶつけるやうにのびたかと思ふと、この雄辯なる蛙は、見る間にその口に喞へられた。

「からら、大変だ。」

「ころろ、大変だ。」

「大変だ、からら、ころろ。」

池中の蛙が驚いてわめいてる中に、蛇は蛙を喞へた儘、芦の中へかくれてしまつた。後の騒ぎは、恐らくこの池の開闢以来未嘗なかつた事であらう。自分にはその中で、年の若い蛙が、泣き声を出しながら、かう云つてゐるのが聞えた。

「水も艸木も、虫も土も、空も太陽も、みんな我々蛙の為にある。では、蛇はどうしたのだ。蛇も我々の為にあるのか。」

「さうだ。蛇も我々蛙の為にある。蛇が食はなかつたら、蛙はふえるのに相違ない。ふえれば、池が、――世界が必狭くなる。だから、蛇が我々蛙を食ひに来るのである。食はれた蛙は、多数の幸福の為に捧げられた犠牲だと思ふがいい。さうだ。蛇も我々蛙の為にある。世界にありとあらゆる物は、悉蛙の為にあるのだ。神の御名は讃む可きかな。」

これが、自分の聞いた、年よりらしい蛙の答である。

（大正六年九月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
2007年6月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛙

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/